

Q22 活動の場

ボランティア・バンクをつくりましたが、あまり有効に機能していません。活性化する方法がありますか。

Answer

はじめに

生涯学習活動が活発になり、地域社会ではいろいろな学習・教育活動が行われつつあります。そして、知識や技能が向上・上達した人、学級・講座や研修、指導者養成講座等を修了した人、特殊な技術の持ち主などを、ボランティア・バンクやリーダーバンクに登録をして、市民の学習活動などに役立ててもらおうと情報提供等をしている自治体が多くなっています。中でも、「学習した成果の地域への還元によって、学習者個人の学習意欲が高まるから」、あるいは、「住民同士が教え、学び合うことで地域の連帯感が醸成されるから」という場合が多いようです。

しかし、バンクをつくったのはいいが、「思ったように活用されない」、「バンクに登録したのに活動する機会がない」などの声をよく聞きます<sup>(2)</sup>。「登録者の活用率が高まらない」「登録者が増えない」「存在が知られていない」など、必ずしも十分に機能していない現状があるようです。

□ 学習成果の評価の必要性

このような問題をどうしたらよいのでしょうか。その問題について、ここでは「学習成果の評価サービスの必要性」といった点から検討してみたいと思います。まず、評価サービスの必要性は、具体的にはどこにあるのでしょうか。

第一に、人々の学習要求に応じた、多様で高度な学習が行われつつあります。また、人々の学習を支援するために、

評価の必要性

- 多様で高度な学習実態
- ボランティアの必要性
- 社会で生かす学習成果の評価サービス

体系化された学習機会の提供も行われつつあります。人々の体系的な学習成果の「証明」が何らかの形で行われることが重要です。学校以外で学んだ成果が「正当」に評価されることが、「学歴社会の弊害の是正」にもつながります。そして、知識・技術・能力をもっているかどうかの判断を、「人・人材をほしがらる側」からは、何で（どのようにして）行えばよいのでしょうか。また、「活動したいという人々」にとって、自分が知識・技術・能力をもっていることの証明を何で行い、どのようにしたらよいのでしょうか。何らかの「証明」＝「学習成果の評価サービス」が必要になるでしょう。

第二に、いろいろな場面でボランティアが必要とされるという現状があります。ボランティアは、確かに「誰でもできる活動」といえます。しかし、活動の内容によっては「専門的な」知識や技術も必要とされる場合があります。多様なボランティア活動が現在生まれていますが、そのような活動の中には、一定の専門性を必要とする活動があります。そうした活動にボランティアとして参加するためにも、また、自分が活動できるかどうかを知る手だてとして、評価サービスは重要なこととなります。

第三に、「学習の成果を社会で生かしたい」という人の増加もあげられます。様々な活動で獲得した成果や、学習活動の中で学んだ成果を、職業生活や地域生活などの社会的活動に生かしたいと考える人々は多くいます。資格を目的とした学習が多くの人々によって行われているという事実をみても分かります。学習者は学習した成果を「資格取得」という評価サービスの結果を受け取ることによって、自分の知識・技術・能力を確認できますし、「人・人材を

専門的な活動のボランティア

ボランティアや指導者へのニーズ

社会参加の要求

資格取得

活用の場

- 地域社会の発展
- ボランティア活動
- キャリア開発

人材の登録

指導の能力

ほしがらるサイド]では、知識・技術・能力の面での「条件」を確認することができることとなります。

生涯学習審議会は、学習した成果を「地域社会の発展」「ボランティア活動」「個人のキャリア開発」に生かすことが重要であろうと指摘しました。<sup>(3)</sup>

## ② ボランティア・バンクの登録条件

現実の人材バンクはどのような条件で人材登録をしているのでしょうか。現在ボランティア・バンクを設けている自治体では、「住民から公募し、条件、基準は特に設けず希望者は受け入れる」という場合が多いようです。<sup>(4)</sup> すなわち、人材登録の際にきちんとした知識・技術・能力についての「評価」が行われているとは必ずしもいえません。

先にも述べたように、「ボランティア活動」は自分ができるところをやるのが原則です。しかし、「できること」と「要求されること」とは同じではありません。特に、「依頼主」の方では専門的な知識・技術・能力を必要とする場合はそのことがあてはまります。ボランティアが活動としてやりたいことは「相手」や「場所」のあることであり、望めば誰でも活動できるというわけではないでしょう。

また、特に教育・学習活動に講師などでかかわる場合、それは「人を育てる」活動であり、誰でもよいとはなかなかいえない場合があります。「持っている技術はあっても、教え方が上手ではない」などという場合もあります。「実績」があるかどうか問われるかもしれません。学生が就職活動を行う際を考えても、卒業資格はもっていてもその実力がどの程度であるかについては、希望する就職先で「評価」されます。雇う側がその見極めを行うわけです。

したがって、ボランティアであるから、どのようなこと  
も、どこでも、誰でもできるというわけでもないでしょう。  
このように考えてくると、様々な場面で、活動で身につけ  
たり学習して得た知識・技術・能力などについての「評価

「評価サービス」

サービス」が必要になるでしょう。  
また、既存のボランティア・バンクは「コーディネート  
機能」をもたないところがほとんどではないでしょうか。  
すなわち、どこの誰がどのような活動ができる人であるか  
という情報はあっても、その人の知識・技術・能力につい  
て社会的に認定された成果の情報はほとんどないでしょう。  
しかし、実際に「人材を紹介しなければならない」と  
すると、社会的な責任が生じます。そのような点を補うに  
はコーディネート機能をもったセクションが必要です。そ  
こでは、ボランティアを必要とする「依頼主」と「ボラン  
ティア」を結ぶ際に生じる問題等にも対応した機関が必要  
です。このようなコーディネート機関が成立するためにも、  
「評価サービス」を行う機関が必要になりますし、その  
情報をもとにコーディネート機関は人材を紹介できま  
す。そして、実際に受け入れてもらうかどうかは活動先で  
検討してもらえばよいことになるでしょう。

「コーディネート機  
能」

### ③ 活動の場の開拓と創造

では、学習した人が学んだ成果を活用するとはどのよう  
なことなのでしょう。それは上述したように、職業生活  
や地域社会、家庭生活の上で学んだことを生かすこと  
です。職業生活の向上、新たな職業生活への出発、地域社会  
の指導者としての活動、人間関係の拡大、家庭での家族関  
係の深まりや家庭生活の質的向上など様々な面に生かすこ

活動の場の開拓  
■自らが開拓

とです。

ボランティア・バンクに登録された人材は、実際にどのような場面での活躍が期待されているのでしょうか。その調査結果を表1に示しました。<sup>(5)</sup>教育委員会などのボランティア・バンクでは、主に講師などとしてリーダー的な活躍が期待されているといえますが、「指導者になること」だけが「活用の仕方」であるとはいえないでしょう。

確かに、「活用」というより積極的な生かし方に焦点をあてますと、社会生活とのかかわりが大きくなります。すなわち、

- ①生涯学習のリーダーとして
- ②ボランティアとして
- ③職業人として

学んだ成果を生かすことです。

とはいえ重要な点は、活用の仕方や活動の場の確保は、創造力や努力をもって、ボランティア自らが新しくみつけ、開拓していく必要性も大きいのです。どこで、どのような活動が求められているのか、どのような人材が必要とされているのかなどについて自ら情報を集めたり、探したりすることも重要でしょう。その上で、自分は何ができるかを考えましょう。一方的に、「バンクに登録したのだから、声がかかるのを待つ」という姿勢は疑問です。

学習者自身の努力を踏まえて、行政の支援もまた必要です。とりわけ、これまで社会教育施設で行われてきた事業への参加者が力量をつけ、自ら活動を組織していく場合など、支援を行う必要性は高いでしょう。本来社会教育が目指していたこととも一致するはずで

実際、バンクの活用率を高めるために、多くの自治体で

は、表2のように「登録ハンドブックや登録リストの配布・作成」をあげています。また、広報誌などでの情報提供も行われています。しかし、「ボランティア活動の場の開発」はまだまだ低率です。整備面の充実が望まれます。例えば、既存の施設にボランティアを導入できるようにすることや、新たな活動の場をつくることです。「園芸教室で学んだ人々が実習を兼ねて、農家の職業活動である農作業のボランティアを行う」という試みが行われているというテレビ報道もありました。これまでの考えを大きく変えていくことも必要でしょう。

#### ④ 活動の場と公民館

冒頭で述べたように、地域に多様な生涯学習活動を展開するためには、やはりボランティアに期待せざるを得ませんし、実際に期待している様子がうかがえます。では、具体的にどのような取り組みがあるのでしょうか。公民館以外の事例を含めて、課題を提示しながら、みていきましょう。

県立の教育センターが「生涯学習ボランティア導入に関する試行から得た教訓10か条」をまとめています<sup>7)</sup>。こうしたことが、公民館で検討されていく必要があるのではないのでしょうか。

ボランティア導入10か条

- ① 県民の生涯学習活動を盛んにするためには学習ボランティアの存在が不可欠になる。
- ② 総合教育センターの生涯学習関連の研修事業は、ボランティアの存在があって初めて、フルに機能した。
- ③ 学習ボランティアは行政にとって地域住民を代表するオンブズマンである。

- ④ボランティアと行政の立場はいつも対等である。
- ⑤ボランティアは自主的組織で、活動内容はボランティア自身が決める。
- ⑥ボランティアは絶えず研修し、新人の出入りを活発にすることが大切だ。
- ⑦ボランティアでなければできない分野がある。
- ⑧ボランティアは勉強の場である。
- ⑨事業企画を行政の手から県民の手へ。
- ⑩学習ボランティアの導入は時間をかけて少しずつ。

また、表1の中にも見られたことですが、学社融合を目指す事業の中でもボランティアの活動が始まっています<sup>(8)</sup>。地域の住民や各種団体の人々がボランティアとして、学校の教員とともに、チーム・ティーチングの形式で参加するというものです。

このようにみますと、公民館は、生涯学習施設としての学習機会の提供、学習情報の提供や学習相談に加え、学習成果の活用場として地域に開かれ、民間の団体とともにコーディネート機能の支援を行うことが求められているといえないでしょうか。

[参考文献]

- (1)山本慶裕：国立教育研究所生涯学習研究部『生涯学習のボランティア・バンクに関する調査研究』1996年3月
- (2)同上
- (3)生涯学習審議会『生涯学習の成果を生かすための方策について（審議の概要）』1997年3月
- (4)(1)に同じ
- (5)同上
- (6)同上
- (7)栃木県総合教育センター生涯学習部『学習ボランティアこそが生涯学習推進の担い手』栃木県総合教育センター生涯学習部、1994年12月
- (8)栃木県教育委員会生涯学習課編『学校と地域社会が一体となって子供たちに「生きる力」を育むために－「学社融合」を目指す事業の開発事例－』1997年3月



■表1 活用の場面 (N=110)

内 容	n	%
1 教育委員会や公民館などの学級・講座に講師	64	58.2
2 教育委員会や公民館などの集会・行事に講師	35	31.8
3 調査研究の委員として	5	4.5
4 学校の授業の中で社会人講師として	11	10.0
5 学校五日制などに対応して学校外の活動に協力、参加	33	30.0
6 他部局の行事や活動にスタッフとして参加	14	12.7
7 登録者が独自に学級・講座などを開催している	30	27.3
8 住民の要望する学習内容に応じて、講師として派遣している	48	43.6
9 その他の活用場面	9	8.2

(注) 『生涯学習のボランティア・バンクに関する調査研究』1996年3月

■表2 活用率を高めるための工夫 (N=110)

	内 容	n	%
1	広報誌などでボランティア・バンク制度を定期的紹介	32	29.1
2	広報誌などで登録者を定期的紹介	10	9.1
3	登録ハンドブックや登録者リストを作成・配布	50	45.5
4	コンピュータのデータベースとして作成	7	6.4
5	行政が主催する公民館などの学級・講座の講師として位置づける	26	23.6
6	登録者の研修を定期的実施し、資質の向上を図る	21	19.1
7	住民の要望に応え講師派遣に助成金・奨励金の補助	25	22.7
8	登録者同士で、自主グループを作り独自の活動を充実	9	8.2
9	ボランティア活動の場の開発	11	10.0
10	特に何もしていない	16	14.5
11	その他	9	8.2

(注) 『生涯学習のボランティア・バンクに関する調査研究』1996年3月